

# ナミビア・ヘレロのロングドレスにおける美の諸相 －4つのヘレロ・ファッションショー－

香 室 結 美

## 1 はじめに

2012年12月1日、南部アフリカ、ナミビア共和国<sup>1)</sup>のヘレロ (pl. *Ovaherero*)<sup>2)</sup>の人々は首都ウィントフックで第8回「レジェンダリードレス・デザイナーズ」コンペティションを開催した。年に一度開かれるこのショーでは、ヘレロ女性が日常的・儀礼的に着用するロングドレス (sing. *ohorokweva onde*)<sup>3)</sup>のデザイナー10数名の新作が発表され、1位が競われる。2012年度のショーのテーマは「レジェンダリードレス、オスカーへ行く」であり、黒と金を基調とした飾りが会場全体に施されていた。各テーブルの上には小さな金色のオスカー像が置かれ、中央にはランウェイ付きステージが設置されている。スーツ姿の男性と色とりどりのロングドレスをまとった女性たちで会場は埋め尽くされていた。

「ね、ヘレロってファッションが大好きでしょ！ (You know, Hereros love fashion!)」、1時間押しでやっと始まる、という時に、会場入りした人々を満足そうに入り口で見やりながら、開催委員のひとりである女性は眼を光らせながら私にこういった。彼女自身は黄色いロングドレスで着飾っている。開催委員がデザインしたチケットには、アカデミー賞授賞式のレッド・カーペットを歩くアンジェリーナ・ジョリーと金色のオスカー像に並んで、ロングドレスを着たヘレロ女性が合成されている【写真1】。興味深いことに、ロングドレスをめぐる彼女たちの想像力はハイ・ファッションをまとうセレブリティが集まる米国のハリウッドにまで及んでいた。



【写真1】第8回 レジェンダリードレス・コンペティションのチケット

レッド・カーペットを歩くアンジェリーナ・ジョリー (右) とヘレロ女性 (左) が合成されている

本論は牧畜民ヘレロのロングドレス・ファッションショーにおける美の諸相<sup>4)</sup>から、ロングドレスの継続性と創造性 [cf. Hallam and Ingold 2007] を検討するものである。ヘレロは「20世紀最初のジェノサイド」[永原 2005 : 325] や、「アフリカの植民地における入植者による暴力の原型」[Mamdani 2002 : 10] といわれるドイツ植民地軍によるジェノサイドの被害者として知られている<sup>5)</sup>。従来、ヘレロ女性は革製のドレスを身につけていたが、19世紀以降、西洋風の衣服やドイツ人入植者の衣服の色、形、素材を変化させながら、自分たちの衣服として身につけてきた [cf. Durham 1999 ; Hendrickson 1994]。

人類学者ヘンドリックソンは、ロングドレスはヘレロ社会を構築しアイデンティティを表象する衣服だと述べ、ロングドレスの歴史や意味について論じた [Hendrickson 1992, 1994, 1996]。たしかに、ロングドレスは毎年開催される記念式典で着用される正装であると同時に、ヘレロ社会に複数存在するチーフ族への帰属を表すマーカーとしても機能している [香室 2012]。よって、ロングドレスはヘレロの自己表象の手段のひとつだといえる。さらに、ロングドレスはそれを見る人や着る人にドイツ人とヘレロの植民地的関係を喚起する。そして、虐殺者の衣服を被害者であるヘレロが身につけるといふねじれが、研究者や観光客、ドイツ人といった部外者に謎を抱かせてきた [cf. Gewald 1998]。だがその一方、筆者の現地調査から新たに見えてきたのは、ロングドレスをファッションとして楽しむヘレロ女性の姿であった。

本論ではナミビアとドイツで開かれた4つのロングドレスのファッションショーにおける美の諸相—牧畜民的、都会的、起源的、国家的（ナショナル）—に着目し、ヘレロがいかなるロングドレスやその着こなしを美しいとみなしているのか、その美しさが集団的他者との関係においていかに状況的に現れ、創り直されているのかを検討する。そして、ロングドレスがヘレロ自身の変化する好みや、ドイツ人やナミビア人による認知といった予測不可能な偶発的影響を受けながら創られる不確定なドレスであることを示す。さらに、自己を他者から差異化するだけではなく他者との相互関係 [cf. Durham 1999] や新たな活動の可能性を切り拓くロングドレスの力とはいかなるものなのかを明らかにする。

## 2 ロングドレスの起源と創造性

「日本人であれば着物」というように、それぞれの民族はそれぞれ固有の衣服を持つという思考は根強い。衣服やファッションはカルチュラル・スタディーズの領域で研究されてきたが、カルチュラル・スタディーズ研究者は西洋ファッションと特定の地域や民族集団のファッションを異なるものとして扱う傾向にあった。一方、人類学者は特定の地域で暮らす人々や民族集団を「ファッションなき人々」とみなすのではなく [cf. Allman 2004:2-3]、彼女たちが身につける衣服をドレス (dress)<sup>6)</sup> やファッションとして再考してきた [Allman 2004 ; Comaroff and Comaroff 1997 ; Hansen 2004, 2013; Hendrickson 1996; Maynard 2004]。ドレスをめぐる実践は文化的・政治的・宗教的・経済的境界にではなく、よりグローバルに変化する世界的動向に位置づけられてきたといえる。

例えば、人類学者ハンセンは「民族」ドレス<sup>7)</sup> という表現を用い、ローカルな人々が着る特定の衣服を不変の「民族衣装」としてではなく、彼らの移りゆく好みを反映し変化する最新のファッションとして論じた。『民族』ドレス (“ethnic” dress) はダイナミックであり変化している。そこには一時的な流行さえある。いかなる場所で暮らす人々であっても、ローカルな好みという可変的定義

に基づく『最新のもの』を求める」[Hansen 2004 : 387]。人々の好みや美的感覚は変化しており、それに従ってドレスも変化すると彼女はいう。人類学におけるファッション研究は植民地的歴史の影響も含めた「グローバルな遭遇とローカルな再創造」[Hansen 2013 : 1] を検討する領域だといえよう。

ヘレロのロングドレスがいかに創造されてきたのかを考えると、「創られた伝統」[ホブズボウム 1992] という概念が引き合いに出されることがある [cf. Durham 1999 : 399]。ホブズボウム [ホブズボウム 1992 : 11-13] は「創られた伝統」を政治的意図によって形式化・儀礼化されてきた恒常的な儀礼的行為として定義し、このような伝統を習慣や慣行と区別して考察した。しかし、青木は社会政治的要因によって創り出され革新される伝統という概念と、意図的に創られるものでもない上に変化する文化という概念を明確に区分することはできず、このふたつの概念はむしろ重なり合っていると指摘した [青木 1992 : 475]。加えて太田は、「伝統を保存という概念から切断し、変化と再節合させることによって、伝統が持つ可塑性と持続性の二つの側面を焦点化するような視点」[太田 2008 : 194] が重要であるとして、「いかにして文化的変容を文化的継続ということばで語り続けることができるのか」[太田 2008 : 194] と問いかけた。ここで批判されているのは、伝統を真正か非真正かという二者択一的視点から区分し、分析しようとする観点である。

社会的・文化的生活における創造性を考察したハールムとインゴールド [Hallam and Ingold 2007] もまた同様に、慣例と斬新さ、過去の伝統主義と現在の刷新、変化するものと継続するものを二極化する思考を再生産するのではなく、それに挑戦すべきだと述べている。彼らは「慣習的な創造性」と「真の創造性」を別物とする考え方 [cf. Liep 2001] を批判した。そして、「人間の社会的・文化的生活に台本はない」[Hallam and Ingold 2007 : 2] と述べ、慣習的生活や日常生活から偶発的・即興的変革が生じる可能性を論じた。このような議論は、社会的秩序や構造を単純に反復し再生産するだけではなく、構造を解体したり、思わぬ方向へ導いたりするエージェンシー<sup>8)</sup>としてドレスの色や形を再考することを可能にする [cf. Ortner 1984 : 158-159]。本論では「美しいもの」、そして「女性を美しくするもの」としてヘレロ女性の美の基盤となっているロングドレスがいかにヘレロ女性を惹きつけ、彼女たち自身を思わぬ方向へ導いているのかを民族誌的に描くことを試みるが、まず以下ではヘレロドレスの起源について示しておきたい。

革のエプロン、そして、手首、足首、頭部に装身具をつけた革のドレス・スタイル【写真2 (a)】に取って代わったロングドレスは、ヘレロの最新の好みによって変化してきた「民族」ドレスである。現在のロングドレスは 3-7 枚ほど重ねたペチコート (sing. *ondoroko*)、靴が隠れる丈のロングスカート、膨らんだ肩部と肘下まで伸びた袖、「牛の角」に喩えられるオシカイヴァ (sing. *otjikaiva*) と呼ばれるヘッドドレスから構成されており、アフリカで暮らす女性の衣服であるにもかかわらず、「ヴィクトリア風」と称される。しかし、例えば19世紀末のヘレロ女性【写真2 (b)】の姿は、「牛の角」のようなオシカイヴァを被っていない上に、大きなマントを身につけているなど、現在のロングドレス姿とは異なっている。以下ではヘンドリックソン [Hendrickson 1994 : 45-51] を参照し、ロングドレスがヘレロに着用され始めた歴史を簡単に示す。

ヘレロ女性は、中央ナミビアにおけるライニッシュ宣教団の創始者 C.H. ハーン の妻エマ・ハーン が19世紀中頃に開いた縫製学校でロングドレス作りを学び始めたとされる。授業は1846年に始まり、1850年には40人の現地女性が受講していたという。エマはドレス作りが現地の人々の日常的習慣の



### 【写真2】

- (a) 左上：革のドレスを着たヘレロ女性（ナミビア国立公文書館所蔵 No. 20169）
- (b) 左下：19世紀末、西洋風の衣服を着たヘレロ女性（ナミビア国立公文書館所蔵 No. 2019077）
- (c) 右上：ドイツ人入植者のマネキン（ナミビア国立博物館、香室2012年撮影）

文明化を促進すると考え、ヘレロ女性に1840-60年代の英国風ドレス—しっかりした固い胴着、締まったウエスト、靴までの長さのロングスカート、重ねられたペチコート、ショール、帽子—の縫製を教えた<sup>9)</sup>。ヘンドリックソンはエマの手紙といった資料から、「ヘレロ女性が布の衣服を着たがり、ロングドレス作りになかなりの力と資源を使っていたことは明らかである」[Hendrickson 1994: 46]と述べている。

加えて、ヘンドリックソンはドイツ人入植者の影響以前からヘレロの衣服が現地集団オルラムやナマの影響を受けていたことに着目した。南部から移住してきたオルラムやナマは騎馬、銃、そして荷馬車を装備した軍勢力を背景として、19世紀ナミビアにおける強い政治経済的・文化的影響を有する集団であった。1840年代、交易品として需要が高かった衣服をいち早く取り入れていたオルラムやナマに影響を受け、ヘレロも銃や衣服を所有し始めたと言われる。



19世紀後半、徐々に衣服を着用し始めたヘレロであったが、西洋風ドレスをヘレロの多くが身につけたのは1904年に始まったドイツとの戦争にヘレロが敗北した後だともいわれる [Vedder 1928 : 199-200 ; cf. Durham 1999 : 406]。まとめると、オルラムやナマといった先進的な現地人との相互関係の中で洋服は普及しつつあったが、ロングドレスの受容と形式化はドイツ人入植者との交流を通して進んだといえよう。1940年代には、ヘレロ女性が他の現地集団よりも清潔できちんとした身なりをしており、より多くの布をドレス作りに用いていたことが報告されている [Gewald 2002 : 24-26]。ヘレロ女性のドレスへの関心は当時から高かったようである。

このように、ヘレロのロングドレスは外部に起源をもつが、当のヘレロの人々はドレスの流用性や変化を自覚しているだけではなく、むしろ入植者との交流や混雑性をその特徴として語る傾向にある。また、このような語りは筆者が「ヘレロの衣服の変化やロングドレスが外来であることについてどう思うか」と彼女たちに尋ねたときに出てくるのであり、日常生活ではロングドレスの歴史やロングドレスが外部起源であることは背景化している。インタビュー中、あるヘレロ女性は「[昔の革の衣服は] 私たち特有の衣服ではなくアフリカ人一般のものだ」と述べ、現在のロングドレスこそがヘレロ固有の衣服であると筆者に強調した<sup>10)</sup>。さらに、別のヘレロ女性は「世界が変わっているのに自分たちが変わらないのはおかしい」といい、ロングドレスを「生かし続ける」ためには常に新しい形に変えねばならないと述べた<sup>11)</sup>。近年の発明であるにもかかわらず、ヘレロの人々は現在のロングドレスに愛着を持ち、祖母の代から受け継いできた伝統や文化としてロングドレスを誇っているのである。

「ドレスに対してヘレロ女性が抱いている考えは、不変で、不可避免的にローカルであり、自然発生的であるとして表象される（西洋以外の）伝統についての概念に対するカウンター」[Durham 1999 : 399] だといわれるように、従来の革のドレスこそがヘレロの真の伝統であるという考えや、ロングドレスの真正性を疑問視する考えは、研究者や部外者の視点から生じてきたものである。ヘレロの人々自身は、ドレスの継承と創造、外来であることと固有であることといった部外者にとっての矛盾を問うことに価値を見いだしていないからだ。

そこで、以下では4つのロングドレス・ファッションショーにおけるロングドレスの着こなしに焦点をあて、外来のロングドレスが自分たちの文化であるというヘレロの理論とヘレロの美を具体的に検討していきたい。第一に地方の農村部で開催されたヘレロのモデリング・コンテスト、第二に首都で開催された「レジェンダリードレス・デザイナーズ」コンペティション、第三にナミビア在ドイツ大使館がベルリンで開催したドイツとナミビアの貿易交流10周年祝賀会におけるロングドレス・ショー、第四に国際的デザイナー数名を招聘して全国的に開催された「ナミビア・ファッションショー」におけるマクブライトのショーを取り上げる。

### 3 地方のモデリング・コンテスト——牧畜民的美——

ヘレロの人々はナミビア各地で小規模のドレス・コンテストを開催している<sup>12)</sup>。2012年1-3月、首都に住むデザイナーを対象とした調査を行なうためにナミビアを訪れていた筆者は、3月3日に東部のオマヘケ州都ホバビス近くのエプキロでヘレロのモデリング・コンテストが開催されると聞き、コンテストの審査員として参加した青年デザイナーのマクブライト・カヴァリ氏（以下、マクブライト）と42歳のヘレロ女性モデル、カペナ・ンジャヴェラ氏（以下、カペナ）に同行して調査を行った。

首都から東に約200キロ離れたホバビスからさらに北へ120キロほど未舗装路を進むと、会場が位置するエプキロに到着する。エプキロは人口6千人程<sup>13)</sup>、人口密度0.3人/km<sup>2</sup>の地方である。会場はエプキロ・ポスト3中等教育学校であった。エプキロへ向かう道中では多くの牛、ヤギ、馬といった家畜が見られる。エプキロはアパルトヘイト時代にヘレロの居住地として多くのヘレロが強制移住させられた、極めて牧畜が盛んな地域であり、ヘレロが牧畜民であることを実感させてくれる。ショーのオーガナイザーはエプキロ在住の女性デザイナー・カシャケ氏、スポンサーはナミビアの電気通信会社MTC (Mobile Telecommunications Limited) であった。モデリング・コンテストの審査対象はドレスのデザインではなく、ドレスを着るモデル自身である。そして、このコンテストの評価基準は「いかに牛のように歩くか」であった。

コンテスト参加者たちが泊まったのは、観光客招致のためにナミビア政府が建設した「シリ・ロッジ」という新しい宿泊施設だった<sup>14)</sup>。コンテストの優勝者は「ミス・シリ・ロッジ」の称号を得る。シリ・ロッジの目玉は、牛糞で壁を塗り固めたヘレロの伝統的な方法で建設された、藁葺き屋根の円形の小屋であった。黒のチューブトップに黒のパンツ、大きな紫のペンダント、頭にはベージュのスカーフ、それにサングラスと白のスニーカーを合わせてクールにコーディネートしていたカペナは、マクブライトに手伝ってもらいながら、この小屋の中で洋服からドレスに着替えた。

司会を務めたナミビア放送 (NBC, Namibian Broadcasting Corporation) のDJがヘレロ音楽オヴィリシェ (*oviritje*) に合わせて、「プキ、プキ、プキロ!!!」と会場に呼びかけると、観客たちも立ち上がって踊りだし、「ヒューヒュー!!!」と長い裏声で叫び返した。会場には300人程の観客が集まっていたが、その内20-30名程がロングドレスを着用していた。光り輝くネックレスや光沢あるドレスはモデルたちと見比べてみても遜色がない。ショーの間、観客たちは自分が応援するモデルに向かって声の限りに叫んでおり、会場のテンションは高かった。エプキロの体育館を舞台に競ったモデルは30-40代の女性8名であった。モデルたちは黄緑、オレンジ、水色、ピンクや白を自分の好みに組み合わせ、色とりどりの個性的なロングドレスとオシカイヴァを着用していた。

ショーは3ラウンド構成である。自分の番号を示すバッジをスカートにつけたモデルたちが皆揃って舞台上に登場した後、1番の女性から順に舞台上に登場してウォーキングが行われた。審査基準は「笑顔」、「外見」、「性格」、「ドレス」、「舞台でのパフォーマンス」の5項目であり、各項目の満点は10



【写真3】エプキロにおけるモデリング・コンテストの様子（香室2012年撮影）

- (a) 左：舞台を見つめる観客たち、緑や青系のドレスが約3分の2を占める<sup>15)</sup>  
 (b) 右：出場モデルたち、右端1番のモデルがカペナ

点とされ、その合計点数で勝敗が競われた<sup>16)</sup>。モデリングで特徴的だったのは、「牛のように歩く」(*okukaondja tjimuna ongombe*) というパフォーマンスであった。第3ラウンドにおけるカペナのパフォーマンスをみてみよう<sup>17)</sup>。舞台袖から出てきたカペナはまず優しげな微笑を浮かべ首をゆっくり左右に振りながら、小さな歩幅で足踏みをするように進んだかと思えば、後ろを振り返りながら少し戻ったり、後ずさったりしながら再び前進し、体育館の舞台をゆっくりと一周した。その間、約3分である。足や腰の動きと顔の振りに合わせて、視線も動く。ゆっくり頷いて再び顔を上げ、上目遣いで視線を投げかけるような仕草が繰り返される。腕は体の動きに合わせて軽く振られる。ドレスを広げてみせたり、観客に手を振ったりといった動きは特にない。このパフォーマンスは前方を真っすぐ見据えて直線的に早足で歩く西洋的ファッションショーのウォーキング法とは全く異なっていた。

日常場面においても、ロングドレスを着用したヘレロ女性は決して走ったり、急いで歩いたりしてはならず、一歩ずつゆっくりと歩を進めねばならないといわれる。これは日本舞踊のすり足に近い動きである。しかし、モデリングの場面ではヘレロ的「牛歩」がパフォーマンスとしてより定型化され、優美さの基準となっていた。さらに、このショーの最中に歩き方にうるさい観客の中年女性が舞台裏に乗り込み、モデルたちに歩き方を教え始めるというハプニングがあったと、ショーの後でカペナが笑いながら筆者に教えてくれた。自分たちなりに練習を積んできたモデルたちは、突然の乱入者による「踊っちゃダメ！それじゃゆっくりすぎる！」という指導に驚き、やる気を削がれたという。舞台上での牛歩きに対する中年女性の思わぬ乱入は、歩き方にうるさいヘレロ女性が存在し、理想的な牛歩きの会得にはかなりの修練が必要であることを示している。乱入した女性は【写真3(a)】に写った女性たちの中のひとりだったが、彼女たちは単に余興を楽しみにきたというよりも、厳しい批評の目で舞台を眺めていたと考えられる。

現代日本人である筆者は彼女たちの牛歩きの善し悪しを判断できなかった。さらに筆者は、モデルというと10-20代の若者を想像したため、このモデリングに参加した女性たちがみな30-40代の大柄の中年女性であることに違和感を抱き、その理由をカペナに尋ねた。すると、「若い子たちにはできないからだ」という。このコンテストでは単なる若い表面的な美しさではなく、ヘレロ女性としての成熟度や熟練度が試されていたのである。かといって、50代以上の女性は参加しておらず、ヘレロの美を体現するのに相応しい成熟した身体を有するのは30-40代の女性であるという考えが伺えた。総じて、このモデリング・コンテストは西洋的なモデルのウォーキングを思い描いていた筆者の想像を越えたものであり、牛を中心とした美が体現されていた。

#### 4 首都のレジェンダリードレス・コンペティション——都会的美——

2005年以来、ヘレロの人々は首都で年に一度、「レジェンダリードレス・デザイナーズ」コンペティション（以下、コンペと記す）というロングドレスのデザインを競うコンペを開催してきた。スポンサーはFNB (First National Bank)<sup>18)</sup>である。コンペの目的はロングドレスの現代化と、ロングドレスの魅力をヘレロ社会内外に発信することである。

約20名のヘレロの男女が仕事の合間に協力し合ってボランティアで運営と開催準備を進めており、コンペは年々充実してきているという。本論ではコンペを企画・運営するこれらヘレロの男女約20名をオーガナイザーと呼ぶ。コンペのオーガナイザーたちの多くはナミビアの首都に住むいわばエリート富裕層である。彼女たちは首相官邸、ジェンダー省、中央銀行、ナミビア航空のグランドスタッ

フ、ナミビア大学講師といった安定した職業に就いており、一軒家が建ち並ぶ落ち着いた雰囲気の住宅街に住んでいた<sup>19)</sup>。近年、デザインが古くさい、暑い、締め付けがきつすぎて体に跡が残るといった理由でロングドレスを着ることを好まないヘレロが増えてきたと彼女たちはいう。そこでオーガナイザーはコンペを開催し、ロングドレスのデザインや色の柔軟性を高め、ロングドレスを「生きたまま」楽しむことを目指してきたという。

首都アカデミア地区の大きなプール付の一軒屋に住むナミビア大学講師のエミィ・シランバ氏（以下、エミィ）は、同じくナミビア大学勤務の夫と共にコンペの組織と開催に携わってきた。ふたりともアメリカでの留学経験がある。ベルリンでのショーの成功を経て、オーガナイザーたちはアメリカ（アトランタ）とフランス（パリ）でのショーを企画し、具体的な交渉を進めていた。支援はナミビア政府であった。2005年から始められたというオーガナイザーたちの打ち合わせは、エミィの自宅やナミビア大学の会議室等で行われてきた<sup>20)</sup>。コンペの性格を知るために、調査に協力してくれたエミィと首相官邸に勤務するオーガナイザー代表のインゲ・ムランギ氏（以下、インゲ）のインタビューを取りあげる。

まずエミィ<sup>21)</sup>によると、コンペの目的は第一に文化や伝統を若い人々に伝えていくこと、第二にロングドレスの販売促進であるという。しかし、彼女はなによりドレスが好きだから、舞台上でドレスを観たいからコンペを開催しているといい、「売るためではなく、私たちの素晴らしいドレスをランウェイで見せること」への率直な欲求を筆者に示した。そして、ヘレロの重要な文化であるドレスを保全するためには、ドレスの魅力を高め続ける必要があるという。エミィはシアトル大学に留学中、大学の文化祭でロングドレスを着用したときに受けた観客たちの歓声が忘れられないといい、そのときの写真をオフィスの壁に貼っていた。留学先でロングドレスに歓声を受けた経験が彼女とロングドレスとの関係を深めたのである。

私たちはオホロクェバ〔筆者注：ヘレロ語でドレスの意〕が大好きなのよ。オホロクェバを守っていききたいし、生きたまま、おもしろいままにしておきたい（keep it alive and interesting）。もしドレスを新しいファッションと混ぜたら、それを着ない人はいないでしょ。ヘレロドレスは女性を美しく優雅にするの。デザイナーたちは揃っているのだから、美しい素材を手に入れさえすればヘレロドレスにファッションを持ち込めるの。私たちはとにかく楽しんでるのよ。

コンペにおける魅力的なドレスとは、それを着ていたら一目でヘレロだとわかるインパクトと、常に現代的な形に変化し続けることだという。そして、オーガナイザーが考えるドレスの魅力や楽しみは若者のドレスへの欲求を刺激する目的と合致し、コンペのチケットは毎年完売しており、若者たちの参加も多いという。ヘレロのドレスを「生きたまま、おもしろいまま」にしておく試みは、人々に広く支持されているといえよう。

次にインゲ<sup>22)</sup>は、第一にドレスの現代化を促進すること、第二に世に知られていない「草の根」デザイナーを社会的・経済的に後押しし、ファッション業界の主流へと導くこと、第三にドレスを店頭で購入できる店とドレス作りの素材や材料を売る店を増やすことをコンペの目的として強調した。現在、首都でロングドレスの既製品を販売している店は2軒<sup>23)</sup>だけである。彼女はメンバーであれ



ばドレスを割引購入できるといった、デザイナーと消費者を結びつける販売システムを構想し、デザイナーによる販売協会の母体作りを行ってきた。しかし、ほとんどのオーガナイザーは仕事の合間をぬって無償で活動しているため、実現の目処は立っていないという。ドレスをめぐる活動は彼女たちに金銭的利益をもたらすわけではなく、コンペチケットも赤字にならない程度の料金設定がなされている。

筆者はインゲからチケット（N\$400、約4000円）<sup>24)</sup>を購入し、首都に夫と子どもと住むベラ・シュヴァルツ（以下、ベラ）を招待し、2012年12月1日に初めてコンペを生で観た。審査員はヘレロでもデザイナーである必要もなく、「観客が審査能力を疑うことがないような人物」として会社経営者や、社会に貢献にしている人物、信用できる人物がオーガナイザーによって選出される<sup>25)</sup>。モデルは20-30代の比較的背が高く細身の女性たちであり、ヘレロに限らない。エプキロのショーで見られた牛歩きは行われず、モデルたちはランウェイを真っすぐ端まで歩き、ドレスの裾を広げて細かく縫われたブリーツを見せたり、セットアップのジャケットを脱いでノースリーブのロングドレスを見せたりと、観客にドレスの着こなしを提示した。

デザイナーの経済的・社会的向上のために、コンペのパフレットの裏側には参加デザイナーたちの名前、住所、電話番号が記載されている。これは、自分好みのデザインを提供してくれるデザイナーを探す客の要望を満たすための工夫でもある。客の多くは「美しいドレスは欲しいが自分で作るのは難しいし、でも好みのデザインを実際に作ってくれるデザイナーはなかなかいない」という問題を抱えているからである。したがって、コンペの観客は信頼できるお気に入りのデザイナーを探す潜在的客でもある。現代的なドレスを仕立てるには従来の型紙に手を加えねばならないため、ドレス作りに慣れた年配者であってもデザイン性の高いドレスを容易に作ることはできない。発表されたドレスは買い手につき次第売却され、その後のドレスの流行に影響を与えている<sup>26)</sup>。

中でも、10代のデザイナー、マクブライトのドレスは若者たちの絶大な人気を得てきた。筆者はマクブライトと一緒に街の布屋を訪れた際、彼を見つけたヘレロの女性たち数人が「マクブライト！いつ私のドレスを作ってくれるの？」と次々に声をかけてくる場面に遭遇した。客たちは店内でマクブライトと電話番号を交換し、注文の約束を取りつけていた。若者は斬新で現代的なデザインを作る若いデザイナーに共感しているのである。マクブライトの自宅の仕事場<sup>27)</sup>には出来上がったドレスや洋服が50着ほど掛けてあり、彼は若くして経済的成功を収めつつある。

さて、コンペのテーマはオーガナイザーによる話し合いで決定される。ロングドレスは主に年配の女性を中心に日常的に着用されるほか、結婚式、葬式、そして記念式典といった儀礼的場の正装として着用される。しかし、彼女たちはこれらの正装を打ち破り、ヘレロの文化的・社会的規範を現代のナミビア社会やグローバルな国際社会に適合した形に変えるための挑戦的テーマをしばしば採用してきた。例えば、2007年のテーマ「3色－黒、グレイ、白」はヘレロ社会における色の規範への挑戦であった。このテーマは都市のオフィスで洋服を着て働くときの感覚や、ヘレロ以外の人々も含めた誰もが参加するパーティにおける装いへの意識を反映していたという。以下はインゲの話である。

### 【色のタブーへの挑戦】（インゲ、女性、ウィントフック、2012）

ヘレロの女性にとって黒を着ることはタブーです。黒のロングドレスは夫に先立たれた寡婦が着るもので、純白のロングドレスは花嫁が着るものと決まっているの。でも、私はヘレロ女

性だけど、夫のことは全く考えずにオフィスに黒のスーツを着てくることもあるのよ。それに、西洋諸国では黒や白のドレスを「特別なとき以外にも」着ることができるわよね。私たちは色のタブーについての考えを変えたかったから、テーマとして取り上げたの。キラキラする飾りをつけるなど工夫をすれば、黒のヘレロドレスを作ってもいいのではないかしら。そして白のヘレロドレス、これもまた、ウェディングドレスに見えるけど他の場所でも着れるようなデザインに仕立ててもいいんじゃないかと考えたの。ヘレロドレスはすごく高いから、結婚式のためだけにドレスを作るのは時間とお金の無駄なのよ。花嫁がそれを結婚式で着てウェディングドレスだとわかってさえいれば、何色でもいいのよ。デザイナーたちは「ショーの中で」たくさんの創造（creations）を見せてくれていますよ。

インゲの話からは、ヘレロの女性たちが西洋諸国におけるドレスの自由さやナミビア現代社会で生活する感覚をロングドレスに取り入れることで、日常感覚とロングドレスの折り合いをつけようと試みていることがわかる。本論でいうドレスの現代化とはこのような試みのことである。

さらに、2011年度には「ディアスポラ」というテーマのもと、他国でディアスポラとして暮らすヘレロがどのようなドレスを着るのが課題とされた。オーガナイザーはこの課題を通して、デザイナーと観客に他国について学ぶ機会を設けようとしたのである<sup>28)</sup>。



【写真4】2012年コンペの様子

(香室2012年撮影)

- (a) 左上：優勝デザイナーとドレスを着たモデル
- (b) 左下：出展されたドレス
- (c) 右上：左からエミィ、マクブライト、ベラ

コンペティションのために動いているのは、ドレスの魅力を人々に知らしめたいという、心の底から純粋に湧き上がるなにかがあるからよ。私がドレスを着始めたときは、何でものを着なきゃいけないのと嫌だったけど…。でも[ヘレロの]女の子たちは自分たちのドレスが大好きなの。彼女たちは誇りを持ってそれを着ているし、[ヘレロではない女性たちであっても]誰もが着たくなってしまうのよ。コンペティションのモデルの何人かはナミビア大学の学生だけど、例えば、ツワナと南アの混血の子は「ドレスを着るためにヘレロの男性と結婚しなくちゃ!」といていたわ。それから、人気の若手デザイナーや若者たちの観点からヘレロドレスの外見を発展させることは、他の部族や人々へのアピールになるのよ。私たちは貿易産業省のオヴァンボ女性をコンペティションに招待したことがあったけど、他の文化やそこに込められた価値を知る事は有意義で、「ヘレロドレスのファッションショーを開催するために、このドレスを北部に持って行ってトレードフェアのオーガナイザーたちに相談すべきだ」と彼女はいつてくれたわ。

([ ]は筆者による補足)

オーガナイザーは一般の人々に比べてナミビア国外の人々と接する機会が多く、政治経済的な物事を実際に動かせる立場の仕事に就いている。彼女たちの社会的地位が、ロングドレスを通じて人々を教育するという発想に関係していると考えられる。首相官邸で働くインゲは、彼女自身やエミィら他のオーガナイザーのコネクションを活用し、国際的な場、特にミラノやニューヨークといったファッションで有名な大都市におけるショーの開催を視野に入れて活動してきた。例えば、日本からきた筆者を見ると、「日本でも何かやれないか」と考え、その実現可能性を計るのである。

そして、オシカイヴァが単なる布を結びあわせたものから現在の形に変化してきたように、ヘレロのドレスは「ダイナミックに進化することができる」とエミィはいう。ヘレロのドレスは既に美しいが、若者にも伝わる形に現代化して新たな魅力を開発し、さらには国際的にその存在と魅力を示すことで、ヘレロ女性は楽しみながらヘレロ文化を継承することができるのだという。オーガナイザーたちの活動の力となっているのはドレスの美しさを他者に見せたい、認めさせたいという率直な欲望である。しかし、その欲望がコンペを単なるデザインの向上の場ではなく、ヘレロ社会の規範に挑戦したり、ヘレロの人々に教育の機会を与えたり、より広い世界とつなぐ足場にまで展開させてきたのである。

## 5 元宗主国ドイツでのファッションショー——起源的美——

その展開の一例として、レジェンダリードレス・コンペティションのオーガナイザーとデザイナーが成功させたベルリンでのショーを見てみたい。ヘレロのコンペの知名度や影響力は年々増し、ナミビア政府による国家的事業に組み込まれながら、ナミビアのローカルな特産品のひとつとして新たな価値を付与されつつある。

2010年、貿易産業省(Ministry of Trade and Industry)はナミビア独立20周年と、ドイツとナミビアの貿易関係10周年を祝うトレードフェアと祝賀会(*Gala Abend*)を開催した。そこでもまたロングドレスのショーが行われた<sup>29)</sup>。ナミビア在ドイツ大使館HPによると、祝賀会におけるショーの最大の目玉はヘレロのロングドレスであったという。当時17歳のマクブライトのドレスに注目が

集まった。ショーに参加したヘレロ人デザイナーは2005-2010年までのコンペ入賞者6名であり、それぞれ2着のドレスを出展した。

このショーの特徴は、ドイツ人入植者のドレスに由来するというロングドレスの歴史に焦点が当てられたことであった。ドイツ側が当時のドイツ風ドレスと現在の最新ロングドレスを並べて歩かせる出し物を演出したのである【写真5 (a)】。ただし、ここでは植民地主義やジェノサイドの歴史に直接光が当てられたわけではなく、ファッションを介した両者の繋がりが提示されていた点に留意しておきたい。

### 【ベルリンでのショー】(インゲ、ウィントフック、2012)

他のファッションが登場した時、観客たちはそれをただ普通にチェックしていたけど、ヘレロドレスが出てきた時はもう…。ドイツ人が行ったショーでは、すごく素敵なオレンジのドイツ風ドレスをドイツ人モデルが着ていたの。彼女の髪型は昔のドイツ風スタイルにセットしてあって、オシカイヴァはつけられていなかった。その姿はまさに「ヴィクトリア風」ドレスだったわ。それから彼らはこの女性をランウェイに立たせて、別のヘレロ女性、太ってはいないけれどモデルみたいではない、ヘレロにふさわしい体付きをした女性 (who have a proper Herero body) を登場させて、そのドイツ人女性と一緒に歩かせたのよ。オシカイヴァつきの新しいヘレロドレスは「ヴィクトリア風」スタイルといわれているでしょ。もうこれは…私は泣いてしまったわ。本当に素敵だったから。

ショーにドレスを出展したデザイナーのクリスタ・パウケス氏<sup>30)</sup>とのインタビューでも、昔のドイツ風ドレスを着たドイツ人女性と現在のロングドレスを着たヘレロ人女性が並んで舞台に出てきた場面が回想され、変化したドレスを見たドイツ人たちが驚いていたことが強調された。この演出を観たドイツ人とヘレロ人の双方がドレスの変化に驚き、インゲは涙まで流したという【写真5 (b)】。

インゲが泣いたのは、目の間に突如回帰してきたロングドレスの起源としてのドイツ風ドレスに強く惹きつけられたからではないかと推測される。ロングドレスはドイツ人とヘレロのスタイルという、水と油のようなあり得ないもの同士のねじれた合成 (synthetic) [Comaroff and Comaroff 1997 : 222] から始まった。合成という語は、あるものを受け入れるという意味での受容とは異なる。ヘレロ女性はドイツ人の衣服を受け入れ、取り入れてきたわけではなく、ドイツ人から見ると奇妙なオシカイヴァをつけたり、身体を豊満にするペチコートを重ねたりと、自分たちなりの着こなしを工夫してきた。ヘレロ女性にとって回帰する過去の姿とのつながりを感じることで、ロングドレスを斬新なものに変えていくことは矛盾しないのである。

現地の人々に入植者の衣服を着せることは支配の一形態であるが、その反面、入植者のドレスはヘレロの人々にファッションの快楽をもたらした。このショーではロングドレスの起源の美しさと、変化しながら形成された現在の美しさが並列されることで、二者の歴史的関係がファッションの観点から再構成されていた。そのことは、ヘレロがドイツ植民地主義の歴史を赦すか赦さないかという問題や、ヘレロによるドイツ政府に対する補償訴訟に関する問題<sup>31)</sup>と直接関係しているわけではない。しかしながら、ファッションを媒介として共にランウェイに立つという時間と空間の共有は、両者にドイツとナミビアの対立関係を想起させながら、現在においても政治経済の問題で時に対立する両者



## 【写真5】ベルリンでのファッションショー

(写真は全てナミビア在ドイツ大使館HP<sup>32)</sup>より)

- (a) ドイツ人が用意したドレスを着た  
ドイツ人モデル[左]とロングドレス  
のヘレロ人モデル[右]



- (b) ハンカチを握りしめるインゲ[左]、  
ロングドレスのドイツ人モデル[中央]、  
ヘレロのデザイナー[右]



- (c) ナミビアの若いデザイナー  
(ヘレロではない) が発表した現代  
西洋風ナミビアン・スタイル



- (d) お祝いに参加したナミビアの人々、  
後列左からナマ、オヴァンボ、ダマラ  
女性と、前列のヘレロ女性



の間に共通性を築いてもいる。

ナミビアの元宗主国ドイツでショーを開催するにあたり、ドイツ人は植民地的歴史を想起し、ドイツ風ドレスを起源に持つという歴史を現在のロングドレスに反映させようとした。一方、ヘレロ人オーガナイザーとデザイナーたちは、ドイツとの歴史的関係に焦点をあてたわけではなく、最先端の

ロングドレスを世界に見せたいと考えていた。両者はロングドレスに異なる価値や魅力を投影していたことがわかる。しかし、このショーの最大の盛り上がりは【写真5 (a)】の瞬間であり、両者を惹きつけていた。植民地の歴史は負の関係だけではなく、美を介した肯定的関係を生み出しているといえよう。

## 6 首都のインターナショナル・ファッションショー——ナショナルな美——

ヘレロのドレスを「ナミビアン・ローカル」として売り出す政府、およびヘレロの人々自身による試みは、「ナミビア・ファッションショー」<sup>33)</sup>でより明確になった。最後に、国際的に活躍するアフリカ各国のデザイナーが参加した第1回ナミビア・ファッションショーにおけるマクブライトのドレスに焦点を当てる。ここでは歴史は後退し、ロングドレスがファッションとして、そして、ナミビアを代表するローカルな伝統として紹介されていた。筆者は再びベラを招待し、ショーの観覧に赴いた。

広報担当者ティム・エカンジョ氏によると、このショーの第一の目的はナミビア国内で活動するデザイナーたちに、国際的活動の基盤を与えることであった<sup>34)</sup>。開催者は「国内で国際的なプラットフォームを」と唱え、十分に組織された世界クラスのイベントを開催することを目指した。ショーは西洋的・現代的デザインを国内に紹介するだけではなく、ナミビアの伝統的デザインやローカル・デザイナーを外部にアピールするという試みであった。

そのため、ナミビア国内から5名、国外から6名が新作を発表するデザイナーとして選出された<sup>35)</sup>。そして、マクブライトはローカル・デザイナー、あるいは、トラディショナル・デザイナーとしてその企画意図を叶えた。彼のドレスは「優雅な伝統と現代的衣装の融合」と各紙で報道され、高い評価を得たのである。また、彼自身も有名デザイナーのトラレ氏との競演を「夢が叶った」と語り、トラレ氏や他のデザイナーから多くの事を学び刺激を受けたと話している<sup>36)</sup>。

ここで、マクブライトが発表したドレスを見てみたい。この日のために新たに作られた20着はコンテスト後、買い手がつき次第、客に直接売られている。ドレスを着用したモデルは長身の痩せ型であり、ペチコートも1-3枚程度しか用いられていなかったため、一般的なヘレロ女性よりもシルエットが全体的に細く、薄かった。もちろん、牛歩きは見られなかった。観覧席の片側には、30名ほどのロングドレス姿の観客が集まって座っていた。彼女たちは気に入ったロングドレスが出てくると、「ホゥー!!!」と立ち上がって腕と腰を振っていた。

前述したエブキロとウイントフックでのショーと大きく異なっていたのは、第一にデザインの自由さである。例えば、肩や腕を出すデザインやテールカットはふたつのショーでは見られず、許容されるのかも微妙である。ノースリーブのデザインはヘレロ女性に人気だが、多くの場合ドレスと同じ素材でジャケットが仕立てられ、TPOに合わせて羽織られる。50代以上の女性がマクブライトのドレスを着用できるかどうかは難しいという。例えば村の60代の女性に筆者が録画したナミビア・ファッションショーにおけるマクブライトのショーの動画を観てもらったところ、ショーのきらびやかさやドレスの美しさを賞賛する一方、「これはちょっと袖が短すぎるね」といったように、袖や裾の長さの適正さへの言及がなされていた。ドレスの現代化に伴い、このような年配者の不満は年々高まっており、斬新なデザインが全てのヘレロに受け入れられているわけではない。

【写真6】マクブライトのドレス（全て筆者撮影、左列写真は筆者が任意に選択した）

<ヒンバ・スタイルのアレンジ>

(a) ヒンバの少女（2012年）



(b) マクブライトのロングドレス



<オヴァンボ・スタイルのアレンジ>

(c) オヴァンボの一般女性（2010年）



(d) マクブライトのロングドレス



<ロングドレスのアレンジ>

(e) ヘレロの一般女性（2012年）



(f) マクブライトのロングドレス



第二にヒンバ (pl. *ovahimba*)<sup>37)</sup> やナミビアの多数派オヴァンボ (pl. *ovambo*) の衣装がロングドレスに取り入れられていた点である。ナミビア・ファッションショーはナミビア全国に向けられたショーである。したがって、ナミビアのローカル・デザイナーとして招聘されたマクブライトはヒンバやオヴァンボの衣装をデザインに取り入れるよう開催委員から要請されており、ナミビア全体のことを考える必要があったと筆者に語った。その点が、ヘレロに限らずナミビアの伝統と現代を表現することを任されていたマクブライトと、西洋ファッションで勝負しようとする他のナミビア人デザイナーたちとの違いだったし、その点に成功したために彼は賞賛を得たといえる。

以上、4つのショーにおけるロングドレスの美の諸相を検討してきた。第一に、エブキロのモデリング・コンテストでは牛を中心とした美が見られた。牛のように歩くパフォーマンスが重視され、その動きと「牛の角」と称されるオシカイヴァの造形が重なり、筆者にもヘレロ女性が牛のように見えてきたという発見があった。第二に、同じくヘレロの人々が開催するレジェンダリードレス・コンペティションでは、都会的な最先端ロングドレス・デザインが披露された。このコンペはロングドレスの規範に挑戦し、現代ナミビアの首都圏で暮らすヘレロ女性の社交の場におけるスタイルや日常的感覚に合うドレスの創造が目指されていた。第三に、旧宗主国であるドイツで開催された祝賀会では、ロングドレスの起源であるドイツ人入植者のドレスが登場し、植民地的歴史における美の相に光が当てられた。第四に、ナミビア・ファッションショーでは、伝統的でもあり現代的でもある、ナミビアのローカル・ファッションの代表としてロングドレスが発表された。

## 7 おわりに

これら美の諸相が前景化したり背景化したり、突如浮かびあがったりしながら、一着のロングドレスは創られている。本論では、ヘレロの美がヘレロの若者と年配者、ヘレロとドイツ人、ヘレロとナミビア人といった、集団的他者との関係の中で展開されることを示した。また、美自体もその時々に対峙する他者とのやり取りのなかで強化されたり、創り直されたり、調整されていることがわかった。すなわち、ヘレロの美は単に再生産されているわけではなく、先読みできない他者との関係や他者の視線を介して常に変化していると同時に、洗練され、魅力を増し続けているのである。ロングドレスは既存の社会構造や規範を表象しているだけではなく、それらを打ち破る力を有している。

第一に、ヘレロは西洋風ドレスや現代社会における西洋的ファッションを単に受容してきたわけではなく、牛とヘレロ女性の美しさを結びつけて具体的な形や動きを創り出すというローカルな再創造を行ってきたことを本論では明らかにした。ロングドレスの美の基盤は「牛の角」のようなオシカイヴァ、重ねられたペチコート、袖や裾の長さ、そして、「牛のように歩く」というゆっくりとした優雅な振る舞いであった。さらに、西洋ファッション業界においては痩せ形のモデルが標準であるのに対し、ヘレロ女性はふくよかな体型をペチコートでさらに一回り大きくするという、豊満な肉体を美の理想としていた。牧畜を主な生業とするヘレロ女性に牛のイメージを投影させる背景には牛と共に生きる人びとの日常生活があると考えられる。

第二に、牛の美や、現代ナミビア社会に生きる女性としての美が育まれる今、ドイツ人のドレスに由来するというロングドレスの歴史はヘレロの日常生活においては重要な意味を持たなくなっている。だからといってドイツ人との関係が完全に忘れ去られているわけではなく、常に想起可能であることが、ロングドレスの起源として登場した豪華なドイツ風ドレスを見て感動したインゲの反応から



明らかになった。ロングドレスの起源としての西洋的美への憧れや欲望をヘレロの人々はもっており、ある瞬間にその欲望が発露するのである。

第三に、マクブライトのロングドレスがナミビアのローカルな衣装の代表として紹介されたことから、ロングドレスはナミビアの衣装としてますますグローバルな舞台へ出ていく可能性がある。そのとき、西洋ファッションというヘゲモニーにロングドレスがどれほどの影響を与えるかはまだ不明だが、固有の魅力があるからこそ国の代表に値するスタイルとして国際的に認められるという逆説的可能性 [Van Wolputte and Bleckmann 2012] をロングドレスは有している。「西洋支配的なオートクチュールの領域と同様に、[アフリカのファッションにおいてもまた] デザイナーたちは国際的スタイルからアイディアを得るが、極めてローカルに留まってもいる。[すなわち] 土着のファッション経済にもグローバルな姿が現れているのである」 [Rovine 2009 : 134]。単にローカルでもグローバルでもなく、その間で新たなロングドレスを創り続けることが新たなロングドレスの形を決定するのではないだろうか。

ヘレロ女性にとって、ロングドレスを着て放牧することと西洋ファッションの世界に憧れることは矛盾していない。美しい「牛の角」を作ろうと励み、牛のように歩く女性たちが、次の瞬間にはレッド・カーペットに立ってアンジェリーナ・ジョリーの隣で歩き、かつて敵であったドイツ人と手を取りランウェイを歩き、また別の瞬間には国際的デザイナーたちの西洋ファッションと並ぶナミビアを代表する姿として歩いている。ヘレロの人々はヘレロであるということを自己表象するため、あるいは「伝統だから大事である」、「習慣だから着用する」という論理と並列して、「美しいもの」、そして「女性を美しくするもの」としてロングドレスを身につけるが、その美への欲望が他のナミビア人やドイツ人とのつながりを創り出すエージェンシーになっているのである。

ロングドレスは自己を他者と差異づけ、民族やジェンダーをめぐるアイデンティティや社会構造を区分するマーカーである一方、差異と同時に自己と他者の相互関係を創り出している [Durham 1999 ; cf. Hansen 2004]。そして、ヘレロ自身も想像しなかった人類学者を含む他者とのつながりを生み、新たな未来を切り拓いている。筆者には、ヘレロ女性がロングドレスの美に取り憑かれているように思えるが、その美は固定されてはいない。ロングドレスは筆者を含む他者の眼差しを反映しながら変身し続けるのであり、ヘレロ女性もまた彼女たち自身の姿を再帰的に変化させ続けるのである。

## 謝辞

本論で用いたデータは公益信託澁澤民族学振興基金「平成21年度大学院生等に対する研究活動助成」、および、科学研究費補助金・基盤研究A「ケニア海岸地方のスピリチュアリティおよび宗教性に関する人類学的国際学術研究」(2011-2016年度、研究代表者：慶田勝彦)における若手アフリカ研究者に向けた補助により実施した現地調査から得られたものである。また、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と「ナミビア懇話会」(世話人：京都大学 永原陽子氏・水野一晴氏)のみなさまのご厚意により、ナミビア・フィールドステーションを利用させて頂いた。ナミビア大学のエウラ・カヴァリ氏とヴィルフリッド・ハアケ氏には筆者のビザと調査許可証の取得にご助力頂いた。ここに感謝の意を記したい。

## 注

- 1) 旧西南アフリカ (South West Africa, *Südwest-Afrika*)。以下「ナミビア」と記す。まず1884年にドイツ植民地政府の支配が始まり、第一次世界大戦以後から1990年の独立までは南アフリカの支配を受けた。
- 2) ヘレロ人はバンツール系諸語のひとつヘレロ語 (*otjiherero*) を母語とするナミビアにおける少数派の人々である。2011年国勢調査によると、ナミビア中部から東部を中心に約19万人 (ナミビア総人口の約9%) のヘレロ語話者が暮らしている。なお、ナミビアの多数派は人口の約49%を占めるワンボ語 (*oshiwambo*) 話者である。
- 3) 現地語ではオホロクェバ・オンデ、あるいは単にオホロクェバと呼ばれる。オホロクェバは英語では 'dress' と訳され、日本語でいう一般的なロングスカート、ワンピース、ドレスを指す。オホロクェバに長いという意味のオンデをつけると、ロングスカートやロングドレスという意味になる。
- 4) 本論は「相」という語を、単に「①物の姿・ようす」(『大辞泉』第二版下巻 p.2099) の意味で用いる。本論はウィトゲンシュタインらによる哲学用語である「アスペクト」の現れ方や変化について理論的に考察するものではない。
- 5) ジェノサイドの詳細については永原 [2005、2009] に詳しい。ヘレロだけではなく、ナマ (Nama) の人々もまたジェノサイドの対象として殺害された。1904年に始まった戦いとジェノサイド、および、1908年まで続いた強制収容所での使役、劣悪な環境による病死、飢え、処刑、性暴力によって、ヘレロは人口の約80%を失ったとされる。ボツワナ、アンゴラ南部、そして南アフリカなどの周辺国へ逃亡したヘレロも多く、ジェノサイド後のヘレロはドイツ植民地政府により財産、土地、指導者を法的に剥奪され、社会経済的な生活基盤を失った [永原 2009]。
- 6) 固定的で伝統的な意味が強い衣装 (costume) からドレスへと、使われる用語も移行してきた。なお、ドレスという語は衣服だけではなく、衣服に合わせるアクセサリや帽子といったものも含むコーディネート一式を指す [Hansen 2013]。本論では近年のファッション研究に従い、近年の議論において衣服の流動性や身体との関係性を論じる際に用いられ始めたドレスという語を用いる。本論では「衣服」という語を単に、人間が身につけるものを指す語として用いる。
- 7) ここでいう「民族」ドレスは、ヘレロの人々のような言語、親族体系、生業等をゆるやかに共有する人々が着用するドレスのことを指すが、「民族」が生得的あるいは永続的に固定されていることを意味しているわけではなく、日常的感覚として存在する人と人との言語等を媒介とした集団性を指している。
- 8) ラトゥールらが提唱するアクター・ネットワーク・セオリーや、エージェンシーに関するジェルの議論を参照した近年の「もの」研究 [床呂・河合 2011] では、エージェンシー行為の主体性・能動性を人間だけが備えているとする思考を批判し、「ひとと『もの』からなる関係的なネットワークに分散された」 [床呂・河合 2011: 16] エージェンシーを捉えることが目指された。本論ではエージェンシーという概念について詳しく論じることができなかったが、人にはたらきかけ、人と「もの」や人と人との関係の再構築を迫る力 [岩谷 2011: 236] としてこの語を用いる。
- 9) エマ・ハーンはヘレロのスタイルについて、「英雄であるチーフのひとり、服の上に茶色いシルクのドレスを重ね、肩に銃を下げながら雄牛に乗っていた。多くの人々が、ナマ女性のボンネットやボルカ・ジャケット、ガウンなどを身にまとっている」という手記を1864年に残した [Hendrickson 1994: 51]。1860年代にはヘレロは洋服を取り入れていたものの、当時のヘレロのスタイルには西洋、ナマ、ヘレロの衣服が入り混ざったものだったようだ。
- 10) ヘレロ女性へのインタビューより (オカカララ、2009年、英語)。

- 11) エミィ・シランバ氏へのインタビューより（ウィントフック、2012年1月10日、英語）。
- 12) 例えば、2012年3月24日に西部のウォルビス・ベイでヘレロのモデリング・コンテストが開催された。また、ショーの調査のためにエプキロを訪れた際にも、別の日にエプキロで行なわれていたモデリング・コンテストの出場者（「決勝進出者」といった標を掲げてロングドレスを着ていた）と出会った。
- 13) ナミビア2011年国勢調査結果（Namibia 2011 Population and Housing Census Indications、[http://www.nsa.org.na/files/downloads/95e\\_2011%20Population%20and%20Housing%20Census%20Indicators.pdf](http://www.nsa.org.na/files/downloads/95e_2011%20Population%20and%20Housing%20Census%20Indicators.pdf)、最終アクセス日2013年1月5日）より。
- 14) コンテストが政府が建設に力を注いだシリ・ロッジの完成と開業に合わせて行われたこと、そして、実質的に政府所有の会社であるMTCがスポンサーであることから、その背景に政府の働きがあったことが伺える。エプキロという地方のショーが国家的な事業と連動して展開していることに留意しておきたい。MTCの収益の66%はナミビア政府が握っている。MTC・HP（MTC Vision&Mission、<http://www.mtc.com.na/about/vision-mission>、最終アクセス日2013年1月5日）より。
- 15) このコンテストの観客の女性たちの約3分の2が緑系のロングドレスを着ていたことには意味がある。エプキロは緑を自分たちの色とするヘレロの一派ムバンデル（pl. *ovambanderu*）が多く住む土地であり、この夜の観客の多くもムバンデルだったと推測される。
- 16) 審査員は、自作のワインレッドのベロア地のスーツを着たマクブライト、ウィントフック出身の女性、ヘレロが多く住む町オカカラで開催されたモデリング・コンテスト（2011年）優勝者の女性、モデリング・コンテストに参加経験のある地元の女性であった。審査員たちもロングドレスで着飾っていた。私はマクブライトの友人として舞台の前に設けられた審査員席に座らせてもらいショーを観察した。
- 17) カペナは優勝を逃したが、2-4位に与えられる「プリンセス」の称号を獲得した。
- 18) FNBは例年N\$70000（約70万円）、2010年はN\$50000（約50万円）をコンペティションに提供した。
- 19) ウィントフック南部のアカデミアやホッホランドパークなど。アパルトヘイトが終わるまで、南アが定める「黒人」がこれらの地区に住むことは禁止されていた。
- 20) 毎年、コンペティションの準備は6月頃から始められるが、2011年はアメリカのアトランタでショーを行う企画があったために2月頃から打ち合わせを繰り返してきたという。打ち合わせではどのようなテーマが人々を惹きつけるか、支援者をどう募るか、どのデザイナーを海外のショーへ連れて行くべきかといった具体的な議題が出されていた。
- 21) エミィ・シランバ氏へのインタビューより（ウィントフック、2012年1月10日、英語）。
- 22) イング・ムランギ氏へのインタビューより（ウィントフック、2012年1月31日、英語）。
- 23) ヘレロのロングドレスではない西洋風ウェディングドレスを併売しているクリスタのブライダルショップと、CCN（Council of Church in Namibia）にあるグレースの店。
- 24) オーガナイザーによると、チケット代は観客に出されるコース料理代にあてられるため、彼女たちや参加デザイナーは利益を得ないという。とはいえ、N\$400はナミビア人の一般的感覚では安価ではないため、観客は主に富裕層のヘレロだと考えられる。
- 25) ヘレロではない人物やファッションに詳しくない者を審判に選ぶことを非難されることもあるが、オーガナイザーは選定基準を変えるつもりはないという。
- 26) 例えば、2011年のコンペティションではインド風スタイルが2点発表され、その内1点が優勝した。その後、2012年に筆者がナミビア調査に訪れた時にはヘレロ女性の間でペーズリー柄の薄い綿で仕立てられたインド風ロングドレスがデザインとして定着していた。中にはインド女性のビンディを

- 真似して額に赤い点をつける女性もいた。
- 27) 当時、マクブライトはカトゥトゥラの実家の一室を仕事場として使っていた。
- 28) また、残念ながら実現しなかったものの、ヘレロ以外の人々にもロングドレスやデザイナーについて知ってもらうため、イングたちはナミビアにある各国大使館の代表者を集め、各国の食事、衣装、旗といった事柄について学ぶ場を設けることを計画したという。デザイナーたちはインド、中国、南アといった国々で暮らすヘレロがどのようなロングドレスを着るのかを想像し、ドレスを製作したという。
- 29) 貿易産業省はヘレロのドレスの他、オヴァンボ人女性デザイナーによる衣服やナミビアの特産品として革のハンドバッグなどを出展した。
- 30) クリスタ・バウケスへのインタビューより（ウィントフック、2012年2月15日、英語）。
- 31) 2001年、ヘレロの市民団体はドイツ政府と当時植民地主義に関わっていた3つのドイツ企業に対するジェノサイド補償訴訟を起こした。アメリカの連邦裁判所に持ち込まれたこの訴訟はという国際的性質を持ち、国際法と政治に関する研究分野でヘレロは注目を集めるようになった（詳しくは〔永原 2009〕）。ヘレロの市民団体が補償を勝ち取ることはなかったものの、ドイツ政府の公式謝罪を受けたほか、市民団体の活動はナミビアにおけるドイツ植民地主義の再考を促す学術的契機にもなった。
- 32) ナミビア在ドイツ大使館HP（[http://namibia-botschaft.de/index.php?option=com\\_content&view=article&id=220:gala-abend-importshop&catid=41:front-news&Itemid=19](http://namibia-botschaft.de/index.php?option=com_content&view=article&id=220:gala-abend-importshop&catid=41:front-news&Itemid=19)、最終アクセス日2013年1月5日）。Namibian Gala Eveningはベルリンで2010年11月10日に開催された。
- 33) ショーの開催にあたり、スポンサーのNBCがテレビやラジオを通した全国規模での宣伝を行った（ナミビア・ファッションショー公式フェイスブック、“Namibia Fashion Show is Here- Belong!”、<https://www.facebook.com/notes/namibia-fashion-show/Namibia-fashion-show-is-here-belong/392612787476554>、最終アクセス日2013年1月5日）。その他のスポンサーとして、サンラム・ナミビア、ヒルトン・ホテル、ナミビア航空等、複数の企業が協賛しているが冠スポンサーは獲得できていない。加えて、ナミビアの生産力とサービス向上を目的に活動するNPOチーム・ナミビアによる支援も受けた（The Namibian 紙、“Namibia Fashion Show world class”、2012.11.19）。
- 34) The Namibian 紙、“Namibia Fashion Show to give homegrown designers a much-needed platform”、2012.9.20。
- 35) 国内からはマクブライト、イタリアのミラノで衣服製作を勉強中のニコラ・コンラディ、他3名、国外からは南アの有名デザイナーであるデイヴィット・トラレとスザン・ヘインズ、カメルーン生まれでフランスに活動拠点を置くマーシャル・タポロ他3名の、南部アフリカと西アフリカから実績のあるデザイナーたちが参加した。
- 36) The Sun 紙、2012.11.21。
- 37) 北西部を中心に暮らすヒンバはヘレロ語話者であり、ヘレロと親族関係や祖先崇拜、チーフを中心とした社会政治構造を共有している。バンツー系諸族はまずナミビア北部でオヴァンボと分派したが、その後北西部のカオコランドに残った一群がヒンバ、中部に残った一群がヘレロ、東部まで進んだ一群がムバンデルと呼ばれるようになった。ヘレロ、ヒンバ、ムバンデル間の境界やアイデンティティの表明のされ方は極めて曖昧で状況的であり、複雑に重なり合っている。ヒンバの半裸で革の衣服を着る姿はしばしばアフリカの伝統的な人々の代表としてメディアに取り上げられ、文化的真正性を維持する人々として一般的に認識されているが、ヘレロはその姿を自分たちが行わなくなったかつてのスタイルとして語る〔cf. 太田 1996 : 115-116 ; 2001〕。



## 参考文献

- Allman, Jean 2004 Fashioning Africa: Power and the Politics of Dress. In *Fashioning Africa: Power and the Politics of Dress*. Jean Allman (ed.). pp. 1-10. Indiana University Press.
- Comaroff, Jean and Comaroff, John L. 1997 *Of revelation and revolution vol. 2: The dialectics of modernity on a South African frontier*. University of Chicago Press.
- Durham, Deborah 1999 The Predicament of Dress: Polyvalency and the Ironies of Cultural Identity. *American Ethnologist* 26(2): 389-411.
- Gewald, Jan-Bart 1998 Herero Annual Parades: Commemorating to Create. In *Proceedings CERES/ CNWA Summer School 1994*. J. Van Der Klei (ed.). pp. 131-151. CERES.
- 2002 A Teutonic ethnologist in the Windhoek district: rethinking the anthropology of Guenther Wagner. In *Challenges for anthropology in the 'African Renaissance': a Southern African contribution*. LeBeau, D. and Gordon, R. J. (eds.) pp. 19-30. University of Namibia Press.
- Hansen, Karen T. 2004 The World in Dress: Anthropological Perspectives on Clothing, Fashion, and Culture. *Annual Review of Anthropology* 33: 369-392.
- 2013 Introduction. In *African Dress: Fashion, Agency, Performance*. Lauren Adrover, Misty D. Bastian, Jules-Rosette Bennetta, Karen Tranberg Hansen (eds.). pp. 1-11. Bloomsbury Academic.
- Hallam, Elizabeth and Ingold, Tim 2007 Creativity and Cultural Improvisation: An Introduction. In *Creativity and Cultural Improvisation*. Elizabeth Hallam and Tim Ingold (eds.). pp. 1-24. Berg.
- Hendrickson, Hildi 1992 Historical Idiom of Identity Representation Among the Ovaherero in Southern Africa. (Unpublished PhD, New York University.)
- 1994 The "Long" Dress and the Construction of Herero Identities in Southern Africa. *African Studies* 53(2): 25-54.
- 1996 Bodies and Flags: The representation of Herero identity in colonial Namibia. In *Clothing and Difference*. Hildi Hendrickson (ed.). pp. 213-244. Duke University Press.
- Liep, John 2001 Introduction. In *Locating Cultural Creativity (Anthropology, Culture and Society Series)*. John Liep (ed.). pp. 1-14. Pluto Press.
- Mamdani, Mahmood 2002 *When Victims Become Killers: Colonialism, Nativism, and the Genocide in Rwanda*. Princeton University Press.
- Maynard, Margaret 2004 *Dress and Globalization*. Manchester University Press.
- Ortner, Sherry B. 1984 Theory in Anthropology since the Sixties. *Comparative Studies in Society and History* 26(1): 126-166.
- Rovine, Victoria 2009 Viewing Africa through Fashion, Introduction to special issue, Victoria Rovine (ed.). *Fashion Theory* 13 (2): 133-140.
- Van Wolputte, Steven and Bleckmann, Laura E. 2012 The ironies of pop: local music production and citizenship in a small Namibiantown. *Africa* 82(3): 413-436.

- Vedder, Heinrich 1928 The Herero. In *The Native Tribes of South West Africa*. L. Fourie, C.H. Hahn, H. Vedder (eds.). pp. 153-211. Cape Times.
- 青木 保 1992 『『伝統』と『文化』』『創られた伝統』エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー（編）、前川啓治・梶原景昭他（訳）、pp. 471-482、紀伊國屋書店。
- 岩谷 彩子 2011 「ものが見せる・ものに魅せられる：インドの占い師がもたらす偶然という『運命』『ものの人類学』床呂郁哉・河合香吏（編）、pp. 235-253、京都大学学術出版会。
- 太田 至 1996 「ナミビア北西部のカオコランドに住むヘレロとヒンバのエスニックバウンダリーの動態」『アフリカ研究』48: 115-131。
- 2001 『『われわれ』意識の乖離と重なり——ナミビアにおけるヒンバとヘレロの民族間関係』『現代アフリカの民族関係』和田正平（編）、pp. 164-187、明石書店。
- 太田 好信 2008 『亡霊としての歴史：痕跡と驚きから文化人類学を考える』（叢書・文化研究）人文書院。
- 香室 結美 2012 「ナミビア中部、ヘレロ人男性の色分けされたユニフォーム」『九州人類学会報』39: 37-59。
- 床呂 郁哉・河合 香吏 2011 「なぜ『もの』の人類学なのか？」『ものの人類学』床呂郁哉・河合香吏（編）、pp. 1-21、京都大学学術出版会。
- 永原 陽子 2005 『『人種戦争』と『人種の純粋性』をめぐる攻防：二〇世紀初頭の西南アフリカ』『帝国への新たな視座：歴史研究の地平から』（シリーズ歴史学の現在10）、歴史学研究会（編）、pp. 323-370、青木書店。
- 2009 「ナミビアの植民地戦争と『植民地責任』：ヘレロによる補償要求をめぐる」『『植民地責任』論：脱植民地化の比較史』永原陽子（編）、pp. 218-248、青木書店。
- ホブズボウム、エリック 1992 「序論—伝統は創り出される」『創られた伝統』エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー（編）、前川啓治・梶原景昭他（訳）、pp. 1-28、紀伊國屋書店。
- ホブズボウム、エリック&レンジャー、テレンス（編） 1992 『創られた伝統』エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー（編）、前川啓治・梶原景昭他（訳）、紀伊國屋書店。
- 松村 明（監修） 2012 『大辞泉』第二版 下巻、小学館。

## Aspects of Beauty in Long Dress of Herero people in Namibia: Four Herero Fashion Shows

KAMURO Yumi

This paper explores the continuity and creativity of the long dress among the Herero people in Namibia. This study focuses on the ‘Victorian’ long dress of the Herero, influenced by the clothing of German women who settled in Namibia in the 19th century. Although the long dress is worn as a traditional garment or an icon of cultural identity, Herero women also enjoy wearing it as fashion. I present four beauty aspects of the long dress — pastoral, metropolitan, German-origin and national — through four long dress fashion shows held in Namibia and Germany. Furthermore, I clarify that the long dress has improvised, unpredictable creativity reflecting the variable tastes of the Herero living in the modern world as well as the perceptions of the Namibians or Germans.